

令和元年度佐賀プライドプログラム事業の報告書

実施主体：佐賀県

委託先法人：A S S R 株式会社

1 事業名

令和元年度佐賀プライドプログラム事業

2 事業要旨

発達障害のある高等学校の生徒に対し、発達障害者支援の専門家による半年間月2回（計12回）継続的に指導・助言（個別/集団）を実施し、本人の自己認知・感情コントロール・ライフスキル向上及び進路選択（大学/就職）をサポートするとともに、参加者同士でグループワークを行い、交流を図る。

また、個別に発達検査・心理検査などの個別支援を実施し、その検査結果を本人や親に伝えることで、プログラムの効果を増進させる。

さらに、高校生のプログラム実施中、別室で親の茶話会を開催し、親同士の情報交換や繋がりを醸成するとともに、専門のスタッフが親からの相談に答えることで、親の負担軽減や子どもとの関わり方の改善を図った。

3 事業目的

発達障害のある高等学校の生徒本人の自己認知・感情コントロール・ライフスキル向上及び障害特性に応じた適切な進路選択（大学/就職）をサポートすることで、二次障害の事前防止を図るとともに、今後社会で活躍できる人材の育成につなげることを目的とする。

4 事業の実施内容

(1) 令和元年10月～令和2年3月

(2) 利用対象者

発達障害のある県内の高等学校の生徒であり、以下の4つの条件を満たす生徒6名

- ・ 医師から発達障害（LD/A/D/H/D/自閉症）の診断を受けている
- ・ 在籍する高等学校又は高等専修学校の在学証明を得ている
- ・ 高校1年生又は2年生
- ・ 事業の効果測定調査に協力できる方
- ・ 保護者が毎回参加ができる方

令和元年度佐賀プライドプログラム利用者一覧

	利用者名	住所	診断名
1	A	伊万里市	注意欠陥多動性障害
2	B	佐賀市	自閉スペクトラム症
3	C	小城市	自閉スペクトラム症
4	D	鳥栖市	自閉スペクトラム症
5	E	松浦市	自閉スペクトラム症
6	F	小城市	注意欠陥多動性障害

(3) 実施内容

以下の内容で実施

- 1) 保護者への事業内容説明 (1回1時間×6名)
- 2) アセスメントの実施(事前アセスメント1回1.5時間×12名、その他アセスメント2～3回(1回2時間)×6名、アセスメントの結果報告それぞれ1回1時間)
- 3) 個別セッションの実施
生徒本人への事前の事業内容説明
- 4) グループプログラムの実施6回(1回2時間)
生徒向けプログラム及び、保護者向けプログラム

(4) 実施体制

心と発達相談支援 another planet 臨床発達心理士3名

5 支援の実施結果

(1) 自己認知支援

グループ指導外に、検査(ADOS-2)を実施し、生徒の正しい障害特性の理解を行った。グループ指導(計6回)においては、障害の説明、自分の

長所と短所、周囲の人から自分がどう見えているかなどを考え、話し合った。保護者からも子どもの長所・短所を書きだしてもらうことで、自己評価と他者評価の違いについても認識することができ、自身の特性理解を深めることができた。

また、保護者に対し、毎日の子どもの行動記録をつけてもらうことで、子どもの行動の特徴、感情の表現方法、感情の波などの正しい理解を促した。

(2) ライフスキル向上支援

グループ指導外に、検査(Vineland-)を指導前後に行い、現在の生活レベルの適応行動の把握をした。結果を保護者に説明し、子どもの正しい状況把握に努めた。ライフスキル向上のために、ABA(応用行動分析)の随伴性契約についての説明を行い、家での生活支援についての方法を提案した。

(3) 感情コントロール

グループ指導外に、保護者に検査(子どもの行動チェックリストとBDI-)を、生徒本人に対し検査(CDI)を実施し、状況把握を行った。グループ指導において、CBT(認知行動療法)を活用したThe CAT-Kitという教材を用い、自身の感情(喜び・怒り)についての分析を行い、感情コントロールの方略について学んだ。コントロールの方略は、Tool Boxという視覚支援にまとめ、必要なときに思い出せるように、各自持ち運べるようにした。保護者には、日々の子どもの行動記録から感情の理解と、ABC分析の説明を行い、子どもの行動に対し、結果をどのように提示するのがいいのかを説明した。

(4) 進路選択支援

それぞれの進路についての考えを聞き、それぞれの相談に応じた。また、特性を考えての進路選択について説明を行った。ライフスキルが今後の進路においても重要なことから、手帳の使い方の説明と、実際の取り組みを数回に渡り確認・支援した。

6 分析、考察

それぞれの生徒・保護者についての報告

・対象者A

別の参加者から初回に話しかけてもらったことで、楽しみに通うことができていた。書字困難の診断もあるが、自身について考える課題にもしっかり

と取り組むことができていた。また、プログラム終了後にはC D I (子どもの抑うつ尺度)が大幅に下がっていた。ほとんどの回で、両親そろって参加されており、他の保護者との情報共有も積極的だった。

・対象者B

保護者の都合により、補講での受講が多かったが、個別の際もグループの際も、前向きな姿勢で自身について向き合うことができていた。自分の良い面と苦手な面について、よく理解することができた。

・対象者C

積極的に仲間に話しかけていた。自分の話を聞いてほしい思いが強いため、グループでの活動はとても合っていたようであった。学校の先生が連携をとるために来所され、連携することができた。

・対象者D

定期的に相談機関に通っているため、初回より精神的には安定していた。苦手な感情についての学びにおいて、口頭で表現するのは苦手であったものの、紙に書き出すことで、多くの表現ができていた。否定的な言葉を向けることの多かった両親が、本人への言葉かけを意識されるようになり、本人と両親の関係性がよくなった。

・対象者E

学校の登校はあまりできていないが、プログラムには全て参加ができていた。プログラム中にあった修学旅行にも参加することができた。母の観察でも穏やかに過ごせる日が増えている。

・対象者F

登校が難しく、聴覚過敏であるが、プログラムへの参加はできた。学校の先生も熱心であり、わざわざ対応方法を聞くために来所された。C D I (子どもの抑うつ尺度)が大幅に下がった。今後の継続した支援を希望しているため、本機関で対応していく予定。

上記の結果より、参加者全員に対して効果の大小はあるが自分自身を理解して発達障害に対してうまく向き合う姿勢が見られた。また対象者の保護者も本プログラムに参加させることにより、子供の障害に対して向き合う姿勢が見られた。高校生の段階では、幼児期と比較すると親から受ける影響は小さく、人格形成もかなりできているが、親が子の障害特性を理解することによりまだまだ改善の余地がある。今後は、プログラムの検査結果を精査して、効果的な自己認識の方法や親の子に対する効果的な接し方について検討していく。

6 成果の公表実績・計画

佐賀県ホームページで取り組み結果を公表する予定である。